

《研究ノート》

「ロレンス神話」の在^{ありか}処

——公的記録に見るロレンスの母の家系——

井上義夫

D・H・ロレンスの生涯には、「ロレンス神話」とでも呼ぶべき物語が付き纏つてきた。それによれば、彼の父親のアーサーは、しばしば酩酊して帰宅しては家人に暴力を振ふ粗野で貧しい坑夫であり、他方、「技師」あるいは「技師長」を父にもつ母親のリディアは、教師をしたことのある教養の高い中産階級の女性の女性であつたと云ふ。このリディアの幸せな半生は、或るとき失恋の痛手から別世界の住人のやうな男に惹かれ、発作的に結婚に走つてしまつた瞬間に暗転した。失望して夫を疎んじ始めた彼女は、やがて子供たちに献身的な愛情を注ぎ、貧しい家計を遣繰りして彼らの幸せを気づかつたが、ロレンスとリディアの間には、本来夫婦の間に限定さるべき性質の愛情が芽生え、ために若きロレンスは、全うな男性として女性を愛することができなかつた、といふのである。

この物語の発生源を突きとめることは容易でない。ロレン

スの死の直後、一九三〇年に出版されたスティーン・ポターによる初のロレンスの研究書は、ロレンスの父が「見映えに頓着もしなければ誇りもない、ほとんど教育を受けることのない怖ろしい酒呑みの坑夫で、幾分残酷で、不機嫌な」男だつたと叙べ、「ロレンスは父親に代つて母親の敬愛を受け、二人の間には、多分に夫婦の關係に似たものがあつた」と付け加へた。

翌年、ロレンスの妹エイダの回想記等にG・スチュアート・ゲルダの解説を入り混ぜた『若きロレンス』が出版されたとき、この父親像は幾分か修正され、アーサーはダンスの巧いハンサムな男といふことになつた。リディアは、アーサーとは「全く異なる生れつきの」女性で、「父親はかつてシアネス(Sheerness)の造船所の技師シテラとして働いたことがあり、彼女自身は教師(school teacher)になつた」と記された。「結婚後の変化は余りにも激しかつた。彼女は、自分の人生が果てのない醜さと汚れのなかで営れる、殆ど絶えることない単調な人生になるであらうと理解したときの衝撃から回復することがなかつた」とも書かれた。(ただしエイダがこれらの文章を校閲したかどうかについては明示されてゐない。)

その後、一九八〇年に至るまで、ロレンスに関するさまざまな伝記や回想が現れたが、彼の両親に関する限り、すべて大同小異であつたと断定して差支へない。一九七六年の出版になるハリー・T・ムーアの改訂版『愛の高僧』も、リディアの父ジョージ・ピアズオルが若い頃糸捲きと運び機の製作所で働いたと

いふ話を付け加へたが、ジョージの職業は造船所の「職工長」(foreman)あるいは「技師」であり、リディアもまた「教師」(school mistress)を以てゐたと書き、「恋しき息子たち」(Sons and Lovers)の記述のうち「ガートルード・モレルの若い頃の話を「実質上」(substantially)事実に基づくといふエイダの証言を紹介した。一九五〇年に出版されたリチャード・オールディントン『天才の肖像』などは、シアネスの造船所で技師をしてゐたりリディアの父が、金を払つて彼女に「小さな私立学校」で教育を受けさせた、と書いた。無論「私立学校」は、「公立学校」よりも社会的地位が高いといふ前提に基いて、である。

一九八〇年までの出版物で最も注目すべきは、地道な資料蒐集に終始したエドワード・ネールズの著書に現れるメイ・チェインバーズの回想であらう。教員見習生の若者が出入りする一種のサロンのごときロレンス家で、リディアはあるとき、「六人の娘をもつてゐることに気づいた彼女の父が、どういふ風にしてセントから、レース産業で生計を立てられるノッティンガムに來たか」を語つたと云ふ一節がそれであるが、一九五七年に出版されたこの歴大な資料の一節の意味を解き明してくれる人物は、差当り出現しなかつた。私の知る限り、日本においては現在もなほ、ロレンスの母に関する物語が修正された痕跡は見当らないのである。

ハリー・T・ムアが定式化したロレンスの「伝記」は、概ねロレンス自身に出所をもつと言つてよい。一九二九年二月に

『サンデー・デイズパッチ』紙(The Sunday Dispatch)に掲載され、没年の四月、『ロレンス評論集』(Assorted Articles-by D. H. Lawrence)に収められた「自伝的スケッチ」が、何よりも明解に彼自身の出自を語つてゐたからである。

私は肉体労働者の階層に生れ、そのなかで育つた。一介の坑夫でしかなかつた父には、賞讃すべき点が皆無であつた。かなりよく酩酊し、教会には一歩も近寄らず、坑内では、小物の上役達に対してかなり無礼な振舞ひに及ぶのが常であつたから、尊敬される人物でさへもなかつた。(中略)

母は父より勝れてゐたと私は思ふ。母は都市の出身で、本当に下層ブルジョア階級に属してゐた。彼女は、少しも詭ることなくキングズ・イングリッシュを話した。生涯で一度たりとも、父が話し、子供達が戸外で使つた方言の一節を真似ることさへ出来なかつた。

「自伝的スケッチ」は、一九二八年七月、ロレンスが最も「神話」を欲した時期に書かれた。『チャタレー夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover)の第三草稿を完成し、「死んだ男」("The Man Who Died")の第二部を脱稿した直後に書かれたと云へば、作者の意図が自己自身を階級間の隔りを架橋する「神話」の主人公にする(或いは正確には、その試みに破れた孤独な単一者の像を定着させる)ところにあつたことは明白になるが、この文章が独り歩きし始めると、「神話」はいつか「実

話」として受け取られる。

一体ロレンスが彼の両親について第三者に語つたのは、一九〇一年十二月三日をその実質的始りとする。「私の母は名門の古い特権市民 (burgher) の出身で」「自分より身分の低い配偶者と結婚し」(married below)、「温くて心地よいが、不安定な多血質の」夫に「欺れた」といふ内容の書簡である。この文章は、彼と母親が「ほとんど夫婦のやうな愛情で愛し合ひ」、そのため彼が「いくつかの点で異常になつた」と続くが、この書簡が書かれたのは母親の死ぬ九日前、その内容は、当時執筆されてゐた『恋しい息子たち』の初稿『ポール・モレン』(Paul Moeren)に違はない。つまりこの時すでにロレンスは、小説の世界と現実とを、恐らく故意に混同してゐた。一九一四年四月に出版された『寡婦ホルロイド夫人』の「序文」の筆者が、ロレンスの経歴を紹介したあと、『恋しい息子たち』は「多くの点で自伝的であると結論してよいやうに思へる」と認めたととき、すでに「ロレンス神話」誕生の道が開かれてゐたのである。

一九八〇年に出版されたロイ・スペンサーの著書『D・H・ロレンスの郷里』は、この「ロレンス神話」を根底から覆し、ロレンスの異様な家庭がその文学に与へた意味を再考させるための伝記上の基礎を提供した、画期的な著書であつた。

ロイ・スペンサーの調査によれば、リディアはマンチエスタ市アンコウツ (Ancoats) のスラム街で生れた。彼女の父親は「技師」でも「職工長」でもない、日給五シリング八ペンス

で俯れる「機械工」^{mechanic}、或いは「整備工」^{fitter}であり、彼女自身は、十二歳でシアネスの「国民学校」を終へたのち、二年半ほど「教員見習生」をつとめたが、職務怠慢の理由でこの地位を追はれ、十九歳の冬から、事故のために不具となつた父親に代り、二人の妹と共にノッティンガムのレース工場で働いて一家を支へた、といふのである。

五年ほど前、すでに本学小平分校付風図書館の蔵書になつてゐたこの小著を偶々繙いたときの衝撃は、適切な言葉で言ひ表すことができない。それまで歩いてきた道の真中に、実は大きな落とし穴があつたと指摘されたやうなものである。『恋しい息子たち』を「自伝小説」として読む読みを私は斥けてきたし、ロレンスの父親が好人物であつた話は、十五年ほど前に初めてイーストウッドを訪ねた折にも聞かされた。それでもなほ、ロイ・スペンサーの調査結果が信じられなかつた。さらに問題は、リディアの不幸な過去に係る。他人の私事を暴き立てるのが当今の流行であるとすれば、一体「文学」はどの程度「真実」によつて害されるか、といふ問はつねに問ひ続けねばならないと考へてゐた矢先のことであつた。

厄介なことは、ロレンスの「文学」が、伝記的事実と別ちがたく結びついてゐるといふことである。にも拘らず、肝腎のその事實は、ジャーナリスティックな興味と臆測と伝聞に満ちた『愛の高僧』といふロレンス伝の「決定版」により著しく歪められてしまつた。その結果彼の文学は、謂はば「伝記」により堰止められることになつたが、一九八〇年に出版され、一九

八九年には邦訳もされた現在最も権威ある研究家キース・セイヤによる伝記も、何故か『愛の高僧』を殆ど一步も出ることがなかつた。⁽¹¹⁾一九九〇年の出版になるジェフリー・マイヤーズのロレンス伝も亦然りであるとすれば、今一度ロレンスの生涯は、細大洩らさず洗ひ直してみるしかない。私には、活字になつたロレンスのテキストを読み解く限界と、草稿をそれ自体として対照することの限界も見えてきたから、彼の作品が伝記上の事実⁽¹²⁾に照されてどのような相貌を現すかを知る前段階として、ロイ・スベンサーの著書といふ指針により、リディアの家系を公的記録を通して辿らうと考へたのである。

*

リディアの母方の祖父、讚美歌で名高いジョン・ニュートン(John Newton)は、一八〇二年にノッティンガム市の Rice's Place (現在の Ristes's Place) に生れた。生涯レースユ(twist-hand)であつた彼は、二十二歳で結婚したが、レース産業を襲つた一八三〇年頃の不況のため一時期同市の西南の Beeston に移り、一八三四年、景気回復とともにノッティンガム市に戻つてきた。

これらの事実は、郷土史家スティヴン・ベストの調査結果⁽¹³⁾に拠るが、市の The Register Office は一八三七年以降の記録を残してゐるにすぎない。おそらく教会の記録に基づくと思はれるものの、この点に関しては未だ詳らかにしなう。

私⁽¹⁴⁾が得た最も早い時期の公的記録は、ジョン・ニュートンの第二子リディア(ロレンスの祖母)とジョージ・ビアズオルの婚姻証明書である。一八四七年十二月二十六日の日付をもつその証明書によれば、ジョージの職業は mechanic で居住地は Queen Street (現在の Penny Foot St.)、父親ハバート(Robert)の職業は Lace-maker⁽¹⁵⁾である。リディアの父ジョン・ニュートンの住居は Henry Street、職業は Twisthand、立会人はジョージの姉の Rosanna と John Briggs なる人物で、John Briggs は署名が出来ないため、X印を用ゐている。結婚式は教区教会(Parish Church)で挙げられた。

この夫婦には翌一八四八年十一月十二日に第一子エド(Emma)が生れるが、彼女の出生地は Henry Street, Sention⁽¹⁶⁾、父親の職業は Smith とある。

英国の国勢調査(Census)は十年毎に行はれ、百年間は公開されないから、現在閲覧できるのは一八八一年実施分までであるが、ジョージ・ビアズオルの一家は、一八五一年のマンチェスター市の記録に初めて現れる。記載番号百十一(百十の誤記と思はれる)、18 St. Andrew's Street の欄にある、ジョージ二十六歳、mechanic、リディア二十七歳(これも誤りである)、エマ二歳の記載がそれで、出生地はいずれも Nottingham-Shire となつてゐる。この地域一帯は、St. Andrew's Church も含め全て取壊されたため、往時の面影を全く留めてゐない。この事実と、St. Andrew's Church 創立百周年記念出版物、(St. Andrew's Church (Manchester): Holt Publishing Service,

1931) の記述 (pp. 13, 17) によつても、一八五一年頃の St. Andrew's St. が所謂「ヌラム街」であつたことは疑ぐなむ。當時の測量地図 (Ordnance Survey) による地図を国勢調査の記載順序に照し合せてビアズオル家の住家を確定することも、余りにも多くの通りが入り乱れてゐるために容易でないが、彼らの住居は、教会とは反対の並びの (現在は郵便局の集配所になつてゐる) 半は近くにある George Place の周辺の一軒であつたと思はれる。

ロレンスの母リディアは、この家屋で一八五一年七月十九日に生れた。彼女が二歳のとき、一家は市のニマイル南東の Longsight にある Tank Row⁽²⁷⁾ に移り、さらに一年七カ月後にノッティンガム市のスネントン (Sneinton) に戻つた。

同じくロイ・スピンサーによれば、一八五九年七月九日、ケント州シアネスの Spring Garden Passage で、第五子にして最初の男子が生れ、父親と同じジョージと名付けられた。

つまりこの時までには一家はシアネスに移り住んでゐたわけであるが、この Spring Garden Passage をまた取壊されて痕跡をとどめなむ。当時の測量地図によれば、Hope Street と Rose Street の中間にある道幅一メートル、長さ五十乃至六十メートルの露地がこの Passage で、家屋の大きさは様々である。一八六一年の国勢調査は三十九軒の家屋を記録してをり、Rigger, Copper, Smith, Labourer, Joiner, Shipwright, Engine Fitter 等とその家族が住んでゐた。

一八六一年の国勢調査実施時点で、ビアズオルの一家は 10

Chapel St. (現在の Clyde St.) に移つてゐた。家長のジョージは三十六歳で Engine Smith、出生地は Nottingham St. Mary、三十一歳の妻リディアと十二歳で学童 (Scholar) の長女エマの出生地も同じ、ロレンスの母リディアは九歳で学童、出生地は Manchester、エレン (Ellen) は六歳で同じく学童であるが出生地の欄は空白、レティス (Leticia) 四歳、学童 Nottingham Sneinton、ジョージは一歳で Kent Sheerness とある。この七人の家族に加へ、Edwin Clark, Lodger, Mar[Fried], 24, Primitive Methodist [?] Minister, Staffordshire Burslem [Parish] の記載があるから、居住人は都合八人である。

10 Clyde St. のテラスハウスは現存してをり、間口は自動車一台分の長さ程度。二階建てで、階上に二部屋、階下に居間と台所といふ間取りである。細長い裏庭は十五メートルほどあると思はれる。最も新しいジェフリー・マイヤーズのロレンス伝が、ロイ・スピンサーの著作の要約として "Lydia.....Grew up in the slums of industrial Manchester and in the squalid streets of the Isle of Sheppey in Kent." (p. 13) と書つてゐる文章の後半部は事実と反するし、ロイ・スピンサーの記述とも異なる。10 Chapel St. に関して、ロイ・スピンサーは全く正反對のことを述べつつ、どのやうにしてジョージが「シアネスの五つの町のうち最も新しく小綺麗な町に住むことができたらか」と問ひ、下宿入のことに触れてゐるのである。

ロイ・スピンサーは Marine Town の住民として、Dockyard Foreman, Chief Engineer, Master Shipwright,

Surveyor を挙げてゐるが、一八六一年の国勢調査の記録を見れば、Chapel St. の住人は誰一人としてこの管理職ないし上級技師の範疇には入らない。Shipwright、Shoemaker、Boiler Maker、Painter、Engine Smith、Rigger、Labourer、Joiner といふのが住民の全職種であるから、ジョージの職業自体に遜色はない。問題はむしろ、寝室が二部屋しかないこの住居で、(階下の一室を寝室として用ゐた可能性はある) ロレンスの母親が九歳から十九歳までの日々を送らねばならなかつたと云ふ事実の持つ意味であらう。下宿人がこの間引続き同居してゐたかどうかは分明でないが、この一家にはさらにメアリー・アン (Mary Ann) とエイダ・ローズ (Ada Rose) が生れるから、十人が同居した可能性さへ考へられるのである。

一八六九年十二月二十五日、長女のエマは教区教会でアルフレッド・インウッド (Alfred John Inwood) と結婚する。その婚姻証明書によれば、新郎の職業は植字工 (Composer)、その父親ジョン (John) の職業は Labourer、エマの父すなはちジョージの職業は Engineer とある。

つまりこの長女の婚姻届で、初めて Engineer といふ語が用ゐられ、次女のリディア (ロレンスの母) の場合にもこの方式が踏襲されたわけである。末子ハーバート (Harbert) の出生届では後述することくこの語は用ゐられなかつたから、やはりそこに何らかの意図が働いたことは否定できないであらう。少なくともアルフレッド・インウッドとエマの間に生れた子供たちは、リディアとアーサー・ロレンスの場合と同様、母親が

「知的に」劣つた相手と結婚したのだと思つてゐた。(20) といふ語がウィクトリア朝に於てかなり曖昧な用ゐられ方をしたとしても、そのニュアンスが自づから Engine Fitter や Engine Smith と異つてゐたことは疑へないのである。

ロイ・スペンサーによれば、翌年三月、ジョージは作業中に転落事故に遭ひ、歩行の自由を失ふ。約半年間二十ポンドの見舞金で暮したあと、十一月までに一家はノッティンガムに引揚げるのである。

一八七一年三月十九日、ピアズオル家には最後の子供ハーバートが生れた。その出生証明書の出生地は John Street、父親の職業は Engine Fitter と記されてゐる。

一八七一年の国勢調査の記録では、Shenton の百三十八番目 John Street (現在の Kewick St.) の項 ^{Stc}ピアズオル家の記事がある。四十六歳のジョン (ジョージの誤記) の職業は Engine Fitter (Superannuated)。妻のリディアは四十二歳、ロレンスの母のリディアは未婚で十九歳の Lace Drawer、十六歳のエレンと十四歳のレティスも同じ Lace Drawer、以下ジョージ、十一歳、学童、メアリー・アン、九歳、学童、Ada [Rose]、三歳、ハーバート、Under 1 month と続く。

John St. といった往時の面影をとらぬないが、当時の地図を参照すると、ピアズオル家の住居は John St. の北側 Upper Eldon St. から六軒目の家で、隣家四軒は、裏側に四軒の家屋が背中合せに建てられた所謂 “back-to-back-house” である。

裏の袋小路にも八軒の“Back-to-back-house”があるから、やはり「スラム街」に似通つた一面にあつたことになる。

この国勢調査が実施されてから四年半のち、一八七五年十二月二十七日に、リディアは二十四歳でアーサー・ロレンスと結婚する。

このときの婚姻証明書にアーサー・ジョン・ロレンスの職業が採炭請負人(Mining Contractor)と記載されてゐることはよく知られてゐる。その住所はブリンスリ(Brinsley)で、父親ジョン・ロレンスの職業はTaylorである。リディアの住居はJohn St.、父親の職業はEngineer、結婚式はスネンソンの教区教会で挙げられ、立会人ジョージ・オブズオルとウィリアム・オブズオルの署名がある。

一八八一年の国勢調査実施時点で、アーサーの一家はノットハイムガムシャーのSutton-in-AshfieldのNew Crossに住んでゐた。三十三歳のCoal Minerである夫アーサーと二十九歳のリディア、および四歳のGeorge Arthur、二歳のWilliam Ernestの記載があり、子供たちの生地はそれぞれOld Brinsley、Sutton-in-Ashfieldとある。

Keswick St.に住むオブズオルの一家は、十年前の記載とは少しく異なつてゐる。五十五歳のジョージは年金生活者(Pensioner)とされ、五十二歳のリディアの項にService、二十四歳のリディアはJennier、二十一歳のジョージはYarner、十九歳のMary A[m]はJennier、十三歳のヘイタ・ロウはPattern Girl、十歳のハンバーナだけが半童である。

Serviceとは召使・女中等としてかなり恒常的な仕事に従事する者を指す。JennierとYarnerは紡績機に関連した職種、Pattern Girlはレース産業に関する職種を意味すると思はれるが詳らかにしない。

ついでに、三女のレディアスは常識的に考へて、この十年間女子工員として働いてゐたわけだ、ロレンスの母親のリディアも含め、結婚に逃げ場を求めながら限り、オブズオル家の女性たちはどういふ境涯に甘んじるしかなかつたのである。

(一) Stephen Potter, *D. H. Lawrence: A First Study* (London: Jonathan Cape, 1930), p. 19.

(二) Ada Lawrence, G. Stuart Calder, *Young Lorenzo, Early life of D. H. Lawrence* (New York: Russell and Russell, 1931; reissued, 1966), pp. 9—12.

(三) Harry T. Moore, *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence*, Revised Edition (London: Penguin Books, 1976) pp. 21—24. これはジョージ・オブズオルとリディアの結婚に関する限られた『愛の高僧』に引かれた先立の『愛の告白』への参考文献である。(The Intelligent Heart: The Story of D. H. Lawrence (London: Heinemann, 1955; Revised Edition, Penguin Books, 1960))

(四) Richard Aldington, *D. H. Lawrence: Portrait of a Genius But.....* (London: Heinemann, 1950; New York: Collier Books, 1961, 1967), p. 11.

(5) Edward Nehls, gathered, arranged, and edited, D. H. Lawrence *A Composite Biography, Volume Three, 1925—1930* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1959), p. 589.

因みにメイ・チェインバーズによるかなりの量に上るこの貴重な手記に関しては、妹のジェシーの草した手記だとする説がある (George J. Zytaruk, "The Chambers Memoirs of D. H. Lawrence——Which Chambers?", *Renaissance and Modern Studies*, XVII, 1973)。筆者はロマンズのコレリアンスキ宛書簡などを編んだ信頼できる研究者であり、その説も周到であるが、私はこの説は当らないか、或いは仮りにジェシーの手になるとしても、姉から得た情報が多量に含まれてゐると考へる。第一に、筆者はメイがタイプ・ライターを所有せず、しかも草稿のカーボンコピーを作らせた点を問題にするが、ノッティンガム大学には、明らかにメイの書いた短篇小説のタイプ草稿が九篇も所蔵されてゐる (分類番号 La H75, La P 163—170)。さらに、もしジタルクが言ふやうに「ジェシーが『私的記録』(D. H. Lawrence: *A Personal Record*) を一九三五年に出版したあと、コレリアンスキの奨めで、一九三九年頃まで *This Was Our Youth* 或は *The Novel of Youth* と題された小説を書き、問題のメイの手記がその草稿の一部であつたとすると、この「小説」は稚拙とさへ呼ぶほど拙らし、「ロレンス夫人」や「バート」といふ名

が用ゐられることも奇異である。同じネールズによる『複合的伝記』に収録されてゐるジェシーの短篇小説「破産」(“The Bankrupt”) は一応小説としての体裁を具へてゐるから、彼女に当時この程度の「小説」が書けなかつた筈はないのである。(なほ「破産」はレース工場を経営してゐた彼女の祖父がレース不況のために没落する話を扱つてゐる。この実話が『恋しい息子たち』のモレル夫人の祖父の話に似てゐること、リディア・ピアズオルをモデルにしたクローイドン時代のロレンスの長篇小説の残篇 “There Was a Cottage off the Addiscomb Road”) に、やはりジェシーの父がアメリカに行く話が採られてゐる点を考へ合せると、チェインバーズ家の歴史が『恋しい息子たち』のなかに混入した可能性は大きいのである。

加へてこの手記には、ジェシーではなくメイにししか書けなかつた話が多すぎる。例へば、次兄アーネスト・ウィリアムの死ののち、ロレンスは肺炎に罹り死線をさまよふが、その病氣見舞に訪れたのがジェシーではなく彼女の姉であつたことは『私的記録』に明言されたことである。ジタルクは、メイの手記に現れるこのときの興味深い描写を、ロレンスの病状が拭ひ難い記憶を残す相手はメイではなくジェシーであるとして、この描写は、姉の訪問とは別の機会に彼女自身がウォーカー通りのロレンス家に病氣見舞に訪れたときの回想だと主張するのであるが、この論は実に奇妙といふ他ない。私達はむしろ、十六歳のロレンスが母親

に抱かれたりする場面や、ベッドの上で脚が勝手にピクピク動くやうな面白い場面を、ジェニーはなぜ『私的記録』に記さなかつたのかと問うてみるべきであらう。答へは簡単であり、ロレンスが十六歳になつたばかりの頃には、彼女はまだロレンス家に出入りするほどロレンスともその一家とも親しくはなかつたのである。

ロレンス家との親密さといふ点では、押し黙つたやうな印象を与へる彼女は最後まで彼らにとつて部外者であつた。メイの手に、リディアが彼女を気づかふ場面や、アーサーが彼女に話しかける場面が現れるのは、一九〇〇年、すなはち十七歳の年にすでに教員見習生になつてゐた彼女が早くからロレンス家に出入りしたためと、彼女が生来外向的な性格の持主だつたからと思はれる。

(9) D. H. Lawrence, "Autobiographical Sketch", *Phoenix* II (London: Heinemann, 1968), p. 592.

(7) D. H. Lawrence's Letter to Rachel Anand Taylor, 3 December 1910, *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, ed. James T. Boulton (Cambridge: University Press, 1979), p. 190.

なほこの日より約四カ月前の八月四日、Grace Crawford宛書簡にも少しく家族と家屋についての言及がある。父親は炭坑夫で、「私からせびつたわづかの金で少しばかりビールを飲んでゐる」から今は家にゐないといふ内容の文章である。(p. 174)アーサーは、一九〇五年と一九〇六年、

すなはち六十歳前後に二度炭坑事故に遭ひ、そのため跛行を引くやうになつた。一九〇一年十月の次男ウィリアム・アーネストの急死以来の打撃であり、大凡六十歳前後から、さしものアーサーにも肉体的・精神的な衰へが見られるやうになつたと考へてよい。ロレンス二十歳前後のことであるが、一九〇五年六月に大学入学資格を得たロレンスが、翌年九月、ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジに入学するまでなほ一年間補助教員として働かねばならなかつた背後には恐らくさういふ事情があつたと思はれる。アーサーの衰へは、一九一〇年十二月の妻リディアの死により決定的となる。

一九一一年一月十三日、ロレンスは母親が敬愛してゐたリード牧師 (Reverend Robert Reid) に宛てた手紙で、父親を「胸のむかつくやうな、腹立しい、蛆のやうに利己的な男」と呼んだ。尤も彼は、すぐ続けて、「けれども可哀想に思ひます。年取つて、愚かで、寄る辺なくて不毛なのですから——。今日、手紙を書きました」と書き添へたが、この書簡によれば、その前の週のアーサーの収入は二十八シリング六ペンスで、この中から六シリング八ペンスを取つたので娘のエイダが怒つてゐる、と云ふ。その週のアーサーは、二日半しか働かなかつたから稼ぎは少ないだらうとも言ふ (pp. 219—20)。

ロレンスは当時ロンドン南郊にあるクロイドンの小学校に勤務して九十五ポンドの年収を得てゐたし、エイダもま

たイーストウッドの小学校教師をしてゐたから少なくとも五十ポンド程の年収はあつた筈である。母親の子であつたこの二人の、実に満六十五歳の父に対する態度から、私たちは夫に対する生前のリディアの態度をも推測することは出来る。

(10) "Introduction", *The Widowing of Mrs. Holroyd* (London: Duckworth, 1914). この序文の筆者が誰であるかは明記されてゐないが、恐らくフォード・マドックタス・ハプラーの編集所にゐたダグラス・ゴールドリングであらう。

(11) Roy Spencer, *D. H. Lawrence Country: A Portrait of His Early Life and Background with Illustration Maps and Guide* (London: Cecil Woolf, 1980)

(12) Keith Saga, *The Life of D. H. Lawrence* (London: Eyre Methuen, 1980). 邦訳「キース・セイガ著、岩田昇吉村宏一訳、『図説 D・H・ロレンスの生涯』、研究社、一九八九年。この著書の限界は、事によると出版社の企画上の制約によるものかも知れない。

(13) Jeffrey Meyers, *D. H. Lawrence: A Biography* (New York: Alfred A. Knopf, 1990) の著書は「ロイ・スペンサーの調査の紹介とノッティンガム・カウンティ図書館にあるロレンスの家族および知己の談話テープの使用を除けば、ロレンスの龐大な草稿に殆ど目を通してゐない点と、記述が正確な年代順に拠つてゐない点で、概して従

来の伝記よりも後退してゐる。むしろ「ロレンスをめぐる人々の紹介において優れてゐるやうな伝記である。

(12) Stephen Best, "A Talent for Harmony: John Newton of Sneinton", *Sneinton Magazine*, No. 16, Spring 1985.

(13) Laccemaker が Lace manufacturer とは異なり「ウース職人」ほどの意味であることは、後述する John Street にこの職種の人々が多く住んでゐたことから明白である。

(14) ケンブリッジ大学出版局版ロレンス書簡集第一巻のロレンスの「家系図」がヘマの出生年を一八四九年としてゐるのは誤りである。前掲書の "Lawrence: A Genealogy" を参照のこと。

(15) この位置は「ロイ・スペンサーの推定とは異なる。(六四—五頁参照)

(16) リディアの生年月日は「ムアの『叡智ある心情』以来一八五二年七月十九日とされ、殆ど全ての伝記がこれに倣つて来た。(ただしキース・セイガは彼女の生年月日に触れず、翻訳者の作成した年譜で一八五二年とされた。)一八五一年七月十九日説を採つたのはケンブリッジ大学出版局版全集の「家系図」が最初であり、翌年ロイ・スペンサーの著書でもこの日付が記された。私は未だ彼女の出生証明書を閲覧してゐないが、ロイ・スペンサー氏は証明書を扱つたと言ふ。(Information by Mr Roy Spencer in his letter of 26th November 1990 in answer to my ques-

tions.) この生年月日は、後述するハーバート・ピアズオールの出生証明書の日付と一八八一年の国勢調査のリディアの年齢(十九歳)から逆算しても真実であると確認できぬ。

(17) Tank Row は一九七七年に取壊されたこと。

(Information by Mr Roy Spencer in the above mentioned letter.)

(18) このときの家屋は未詳であるが、エマの出生地 Henry Street であると考へられる。(なほこの通りは John Street の北側の通りで、やはり往時の面影をとどめぬ。)

(19) 前記全集版「家系図」に一八六〇年とあるのは誤りで

あらう。

(20) Roy Spencer, *D. H. Lawrence Country*, pp. 66—7.

(21) "The Day D. H. Lawrence Came for Advice", *The Times*, 22 March 1963.

なほ "From a Correspondent" とだけ書かれてゐるこの記事の筆者は、独学して新聞記者並びに編集補助者になつたアルフレッド・インウッド(エマの第一子)の次男ジョージであると思はれる。

(一橋大学教授)